

Kovach & Griffe et al. (2000)	6つの長期ケア施設から終末期痴呆性患者の疼痛に関して知識、経験のある看護者5名ずつの計30名	30分から1時間の半構成的面接	アセスメントにおいて、看護者は痴呆終末期患者には言語的に疼痛を表現する能力はないと認めているが、患者の動作を通じて手がかりを示しており、これらの変化は日々ケアを行い、微細な変化に見ようとしているスタッフにだけ認識できると述べている。疼痛への対処として、看護者は患者の動作の変化は問題行動というよりも痛みのシグナルだと捉え、鎮痛薬は痛みの初期の薬物療法として用いるべきものだと考えていた。看護者は患者にとって薬物への依存よりも安楽さが重要と考え、転倒、摂食能力の低下、便秘などを予防し、家族への配慮も考えながら薬物療法を用いていた。
-------------------------------	--	-----------------	---